火箸

灰かき立てる火箸に過ぎないこの僕だ
何で自分が燃えて空中に飛び出せよう
ただちょっと頭が熱くなって
そして黒く酸化するだけで何も変りはしない
灰になるまで燃えるなんて不可能事
この冷たい身体はまさに‘知’の科学のたまもの
何と丈夫で恨めしい僕の身体
燃え尽きることなんて決して出来ず
ただ、他人の心の中に静かに燃える炎を
灰の中に見出して激しくかき立てるのみ
ああ、燃え尽きてゆく人々の何と幸福な微笑だ
僕を置いて次々に天に昇ってゆく、自由に
幸福になりたい僕なのに
この硬化した体からすっかり‘知’を抜き取って
お前と炎の中で燃え尽きたい僕なのに

(1982.7.23)